＜中学校＞

5 時限目　リスクマネージメントの必要性

マーケットと相談？財布と相談？

今回はリスクマネージメントについて少しお話しましょう。

株であれ為替であれ運用対象は様々ありますが、基本的にマーケットの今後の値動きを予想して、売買を行うことに変わりはありません。しかしながらそれだけで運用の最終目的である「利益獲得」が実現できるでしょうか？１００発１００中の確率でマーケットの値動きを予想できるなら、何も考えることはありません。

しかし現実は、大小様々な損失を繰り返しながら、何とか右肩上がりのパフォーマンスを作り出すのがやっとの世界なのは、投資家の皆さんもすでにご承知でしょう。

そこで必要となってくるのがリスクマネージメントという概念の登場です。これまでのお話の中で幾度となく出てきた言葉ですが、今ひとつピンとこない投資家の方も見えると思います。

一言で「リスクマネージメント」といっても実際にメンテナンスを行っていかなければいけないことは結構たくさんあります。

毎回の損失額の限定、一定期間の損失額の限定、資金配分、成績管理などです。もっといえば売買を始める当初にも運用計画立案をし、その計画と実際の売買の結果を照らし合わせて運用方針を変化させるなどしていかなければいけません。（詳細については“大学”で取り扱っています。）

聞いているだけで大変そうですね。しかしこれらをきっちりやっていかなければ、より安定的な運用は実現することはないでしょう。「安定しなくても一回で爆発な利益が取れればいいや！」という意見の方も見えるでしょうが人間は生き物です。一回おいしい目を見ると２,回３回と続けたくなるものです。そしてそれを継続させるのも「リスクマネージメント」の目的の一つなのです。

まず売買を行う前に誰しもマーケット分析を行うものです。それがファンダメンタルズに基づいたものであれテクニカルズに基づいたものであれ、なんらかの形でマーケットに対してアプローチを行います。いうなれば「マーケットと相談」を行うわけです。そして相談がまとまれば実際に売買を行うという行為に出ます。

そこで投資家は同時に「いくらくらい投資を行おう」、「いくらくらい利益がでそうだ」とか「「損をしてもこれくらいまでだな」とかを考えるものです。いわゆるそこで「お財布と相談」を行っているわけです。その行為自体もそうですが、そこからもう一歩踏み込んで体系的にとらえたものがリスクマネージメントなのです。

「しっかりとリスクマネージメントを行わなければいけないなぁ」とプレッシャーに感じたりする投資家も見えますが、実は誰しもがレベルの違いはあれ、すでに行っているのです。

それほど肩を張らなくてもよさそうだ・・・・そう考えてみてください。

株式会社フィナンシャルヴィレッジ

「マーケットと相談」、「お財布と相談」は一対のものなのです。

マーケットのポイント

前述した「マーケットの相談」について申し越し詳しいお話をしましょう。どのように相談したらよいか？といった内容です。ここではテクニカル分析の例を取ってお話します。

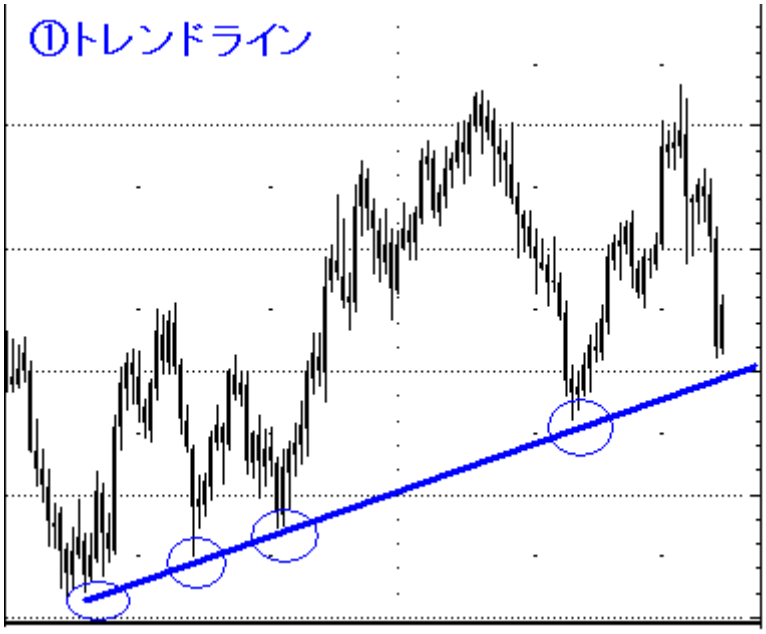
３時限目の実例では、トレンドチャンネル継続というシナリオを立て、そのチャンネルの上限および下限をリスクとリターンの目処としてマーケットのポイントをはかってきましたが、このトレンドチャンネル以外にもマーケットのポイントを推しはかる方法をご紹介しておきましょう。繰り返すようですが、①売買の方針を決め②マーケットのポイントからリスク及びターゲットを設定し③その最大リスク及びターゲットが自分の売買スタンスやルールに合致しているかを判断し④売買を行動に移すという手順の②の部分にあてはまります。

基本的にマーケットのポイントを見極める方法はテクニカル分析の手法を使います。一つ一つの詳細についての言及はここでは行いませんが、一般的な見方を覚えてください。

トレンド分析

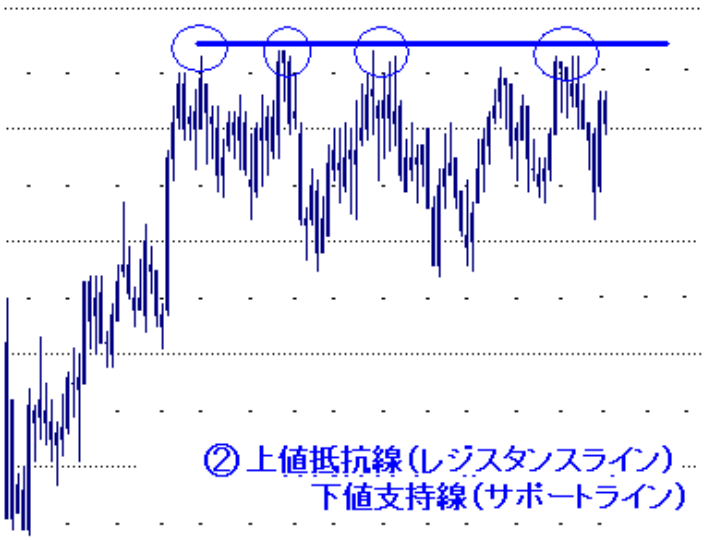
Trend（トレンド）を直訳すると傾向、方向、情勢となりますが、このままの日本語で捉えてください。価格の動きの傾向や方向性を推しはかります。その傾向には、①単純に時間を追って複数の高値や安値を直線で結んだトレンドラインや②絶対値のレベル（水平線）、③平行線の中に変動が納まるフラッグ、④変動が時間をおうごとに収束するペナント（三角持合）、⑤ヘッドアンドショルダーや⑥ダブルトップ（ボトム）などのフォーメーションとよばれるものなどがあります。

一般的なものを列挙しましたが、どれも現在からさかのぼって過去の変動の傾向やパターンをこの①～⑤にあてはめて今後の推移を予測していきます。



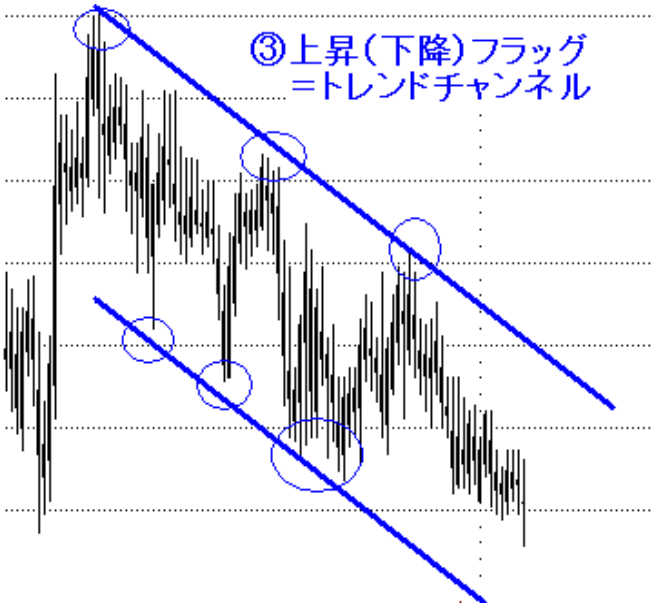
① トレンドライン

青丸印のようなポイントが多ければ多いほど強いトレンドラインとなる。一般的にはこのようなトレンドラインをブレイクした際には、直近の揉合いレベルや安値（高値）まで加速するケースが多いため、リスクの限定ポイントとして考慮できる



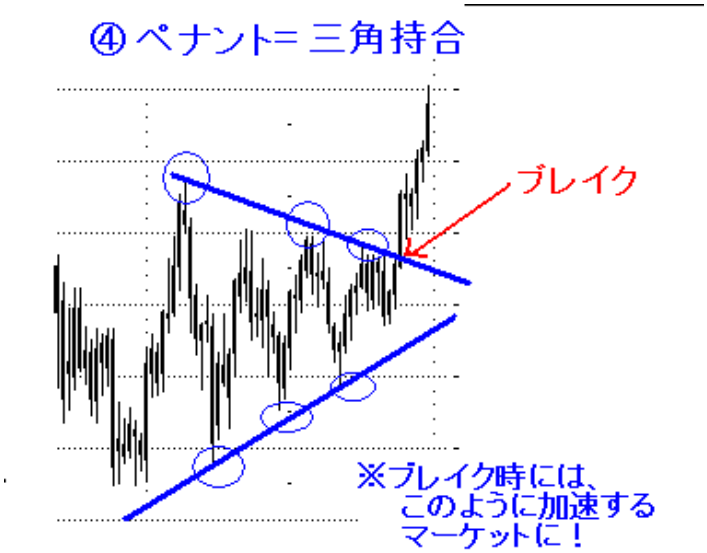
② レジスタンスライン、サポートライン

トレンドラインと同様に青丸印のようなポイントが多ければ多いほど強いラインとなる。このようなラインをブレイクした際には、揉合い期間が長いほどそのスピードおよび値幅が大きいのが一般的である。リスク限定のポイントとして考慮。ブレイク時にストップオーダー（逆指値）でエントリーも有効。



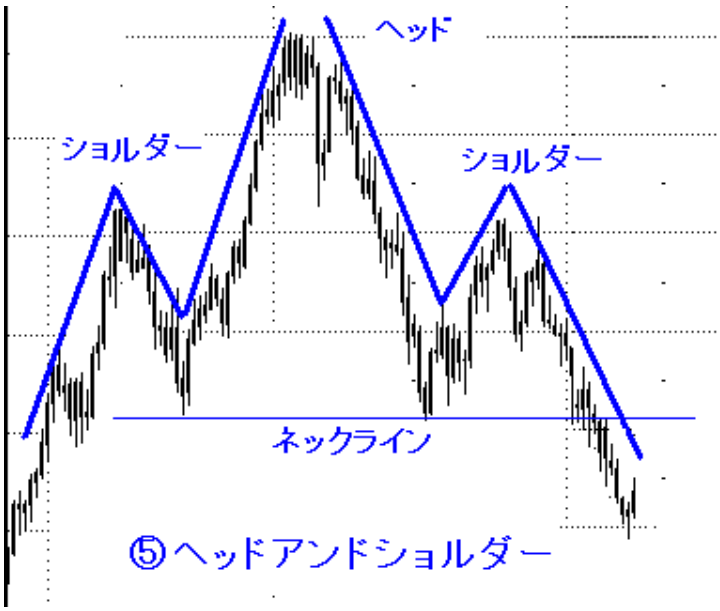
③　上昇（下降）フラッグ

図は右肩下がりとなっているので下降フラッグ（平行線）となる。支持点が多いほど確信の強いトレンドとなる。またフラッグが認められる方向に売買のスタンスを置くのが一般的となり、つまり下降フラッグなら売りスタンス、上昇フラッグなら買いスタンスとなる。フラッグの方向と逆のラインブレイクをリスク限定のポイントとする。



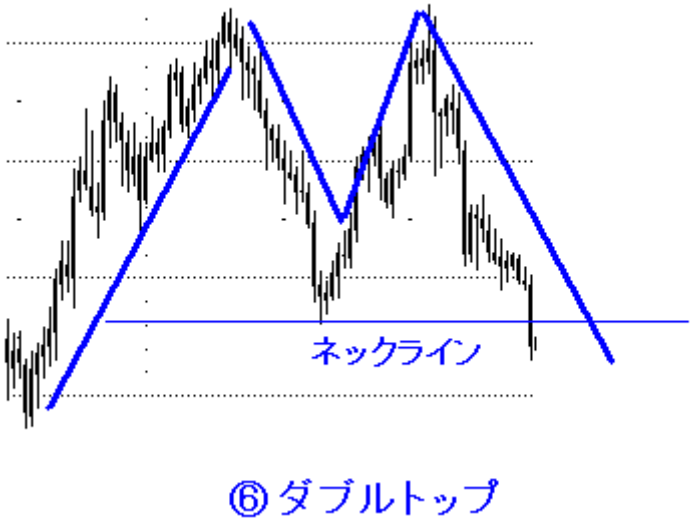
④　ペナント（三角持合）

このパターンも支持点が多いほど信頼性が高い。波動分析では、このパターンが上か下にブレイクした際には、このパターンが認められ始めた時の高値と安値の幅と「同じ値幅の波動」がおきるといわれ、ブレイク時には加速するパターンが多い。このパターンでリスクを限定する際には、リスク限定のストップオーダーを忘れずに！



⑤　ヘッドアンドショルダー

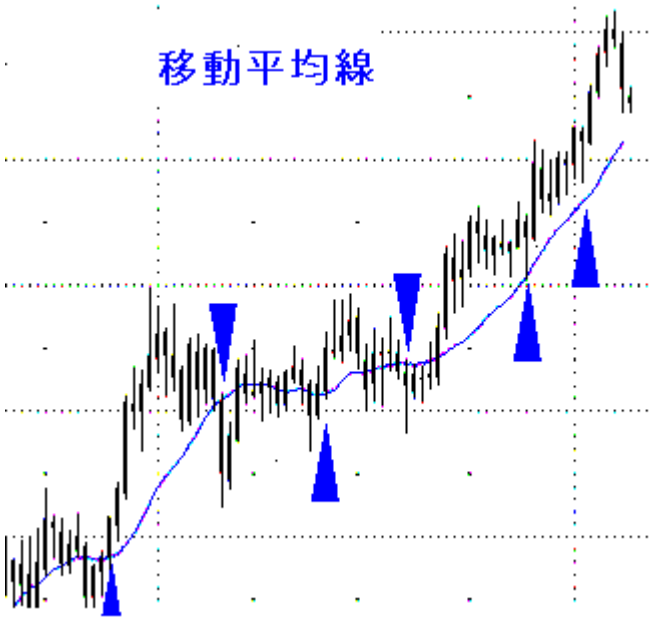
①～④までと違いフォーメーションと呼ばれる天井形成のパターンとなり、正確なラインを引くことはできませんが、ネックラインと呼ばれるこのフォーメーションを定義付けるラインがブレイクされた際には、マーケットは加速するためリスク限定のポイントとして考えることができます。上下を反転させて底値形成のパターンとしても使うことがます。



⑥　ダブルトップ（ボトム）

⑤と同様にフォーメーションの一種となり、天井形成のパターンとなります。これも⑤と同様にネックラインのブレイクをリスク限定のポイントに置いたり、１回目のトップ（天井）の部分と同じレベルをポイントに考えることができます。つまり、前回高値を上抜いたら一段高となる可能性が高まるため、売っていた場合の逃げ場となります。

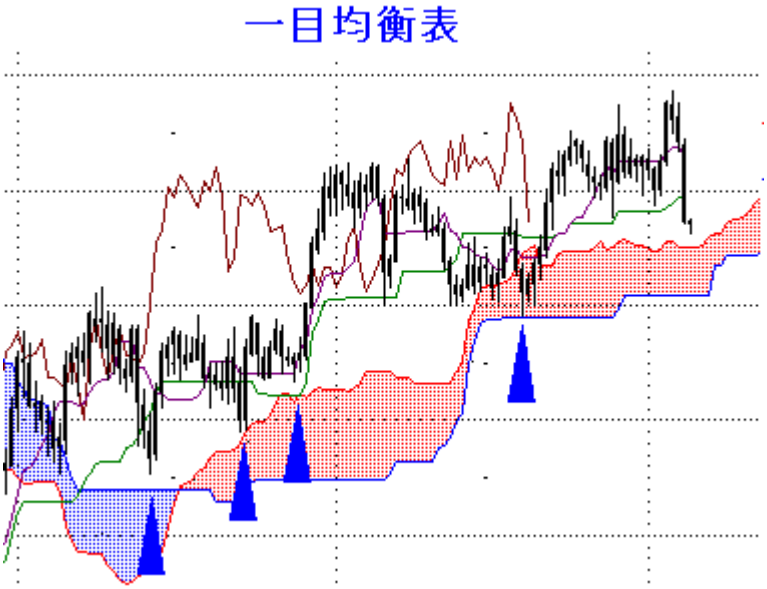
（移動平均線）



任意の期間の平均値を結んだものを移動平均線といいます。

移動平均線もトレンドラインと同様の見方をしていきます。図の上に三角印で指示点を示してあります、この支持点が多ければ多いほど信頼性の高いものとなるのは、トレンドライン同様となります。この移動平均線をリスク限定のポイントとしたり、マーケットと乖離している際にはターゲットのポイントとして使います。

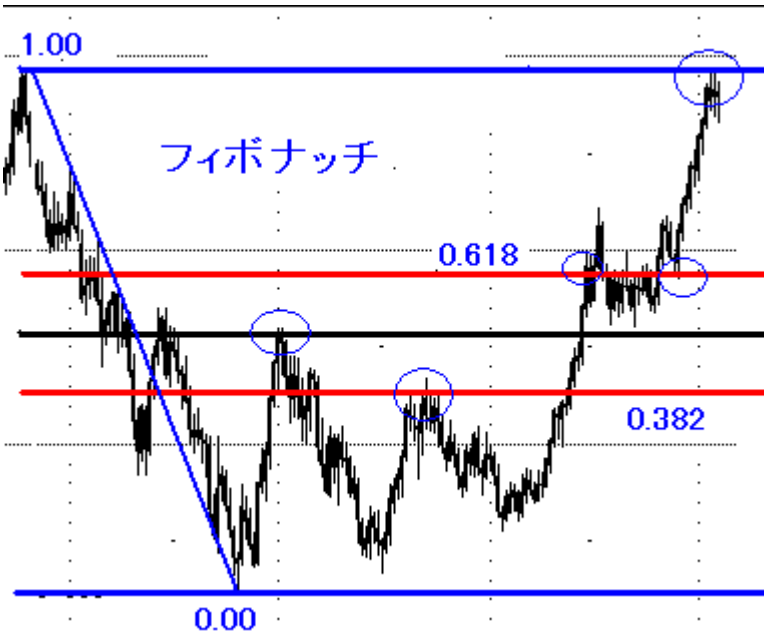
（一目均衡表）



一目均衡表という分析手法では、図に赤や青い帯で示してあるような雲と呼ばれる判断基準があります。この雲の帯の上限や下限がマーケットの支持点になったり抵抗点になったりします。そのポイントが矢印で示してある部分となります。この雲の上限や下限をマーケットのポイントとして捉えることができます。

一般的に５分足や１時間足といった短期のチャートよりも日足、週足といったチャートに適します。

（フィボナッチ級数）



よく半値押しとか３分の一戻しといったことを耳にされると思いますが、その基準になっていますのがフィボナッチ級数と呼ばれるものになります。

長期のチャートで見た場合に新値が更新されている状況では、どの値位置がターゲットとなっているかを推しはかる際に用います。

図の上では、直近の高値と安値を 1.00 という波動で捉えその波動の 0.382、0.500、0.618 という割合の値位置をポイントとして捉えます。丸印で囲ってあるポイントが、この手法が指示されていると考えられるポイントとなります。

以上数種類の分析手法をごくごく簡単に紹介させていただきましたが、ここで注意しなければならないのは、このパターンなり傾向が崩れたポイントでは、トレンド（傾向・情勢）が変わったと即決し、マーケットに変化が認められとして、現在の損益状況にかかわらず速やかに撤退をするべきだということです。

また、リスクの部分はトレンドラインで判断しリターンの部分は移動平均で行うといったように複合的に使っていくことによって、マーケットに存在するポイントを推しはかっていきます。このリスクやリターンのポイントがみえない時は、そのマーケットの波動に参加するべきではないでしょう。思わぬ落とし穴が待っているかもしれませんから・・・・